

[042]中国文学論集表紙奥付等

<https://hdl.handle.net/2324/1462136>

出版情報：中国文学論集. 42, 2013-12-25. 九州大学中国文学会
バージョン：
権利関係：

彙報

○開講科目(二〇一三年度)

【全学教育科目】

*印は他講座教員との共同オムニバス授業

古典の世界「東洋のこころ」東洋医学の祖「史記」扁鵲倉

公列伝講読(前期)

静 永 准教授

【文学部・学科共通科目】

コアセミナー(前期)

竹 村 教授

文学基礎(後期)

竹 村 教授

人文学Ⅰ「東アジア世界の交流と変容」(後期)

竹 村 教授

人文学Ⅱ「生と死の探求」(後期)

竹 村 教授

古典語(漢文)ⅠⅡ(帝京大学福岡)

静 永 准教授

中国語(中級)ⅠⅡ・中国語初歩ⅠⅡ

中村昌彦 教授

(九州産業大学)

呉紅華 教授

中国語会話ⅠⅡ・中国語作文ⅠⅡ

林 教師

中国語科指導法Ⅱ(前期)(佐賀大学)

中尾友香梨 准教授

【文学部・中文講座科目】

講義 中国の出版文化と中国文学史研究

竹 村 教授

演習 『東周列国志』演習

竹 村 教授

講義 史記扁鵲倉公列伝講読(前期)

静 永 准教授

講義 唐詩テキスト論(後期)

静 永 准教授

演習 千載佳句所収唐詩訳注(19)(20)

静 永 准教授

演習 宋词選読

林 教師

演習 中国文学研究法

林教師・静永准教授

演習 中国語文法研究(言語文化研究院)西山 准教授

集中講義 東アジア漢文化の解放と創造(後期)

(名古屋大学) 加藤国安 教授

【人文科学府】

講義 中国の出版文化と中国文学史研究

竹 村 教授

演習・博士演習 王昭君文学史研究

竹 村 教授

演習 長恨歌抄訓読(前期)

静 永 准教授

演習 楚辞研読Ⅰ(後期)

静 永 准教授

演習・博士演習 書船庸譚訓読ⅠⅡ

静 永 准教授

演習 中国文学研究法

林教師・静永准教授

論文指導 中国語学中国文学の諸問題

竹 村 教授

論文指導 中国語学中国文学の諸問題

静 永 准教授

○学位論文

(二〇一三年三月学位取得)

古代漢語における指示人称表現研究

西山 猛

(博士(文学)乙)

『封神演義』鍾伯敬評の研究

(修士(文学)) 岩崎 華奈子

謝靈運「山居賦」研究

(修士(文学)) 東 美緒

呉偉業の詠物詩研究

(学士) 今村 彩乃

陶晶孫の福岡滞在と九大ファイルハーモニイ会

(学士) 幸島 光義

梅娘の女性観と与謝野晶子 [学士] 松岡 千絵莉

唐詩における子女描写 [学士] 金見 正悟

近現代中国における『千字文』 [学士] 吉田 光一

(二〇一三年九月学位取得)

蘇軾文学の成立と蘇氏一族—和陶詩を中心に

[博士(文学)甲] 原田 愛

漢代五言詩歌史の研究 [博士(文学)乙] 柳川 順子

孫武の生涯と『孫子』 [学士] 岡 駿介

○中国文藝座談会

第二六三回(二〇一二年十二月二十二日) 於四階会議室

孫武の生涯とその兵法 岡 駿介

郭沫若「行路難」と佐賀熊の川温泉 田中 千絵

中島敦と漢詩 榎本 さや香

北宋使遼関係詩考 中村 昌彦

陳子龍の擬古詩について 中 筋 健吉

第二六四回(二〇一三年二月二日) 於四階会議室

敦煌変文における伍子胥とその家族 鈴木 裕亮

杜甫「秋興八首」の解釈をめぐって 永江 健太

馮夢龍『笑府』の分類について 山口 綾子

白氏新樂府「七德舞」考 静 永 健

日本と中国における『椿姫』の翻訳—同時代東アジアの
文脈から見た林沢小説 中里見 敬

第二六五回(二〇一三年三月二日) 於四階会議室

杜甫「旅夜書懷」創作時期の再検 張 宇超

「処州孔子廟碑」にみえる韓愈の道統観 趙 二超

台湾国家図書館所蔵「新雕白氏六帖事類添注出経」につ
いて 大 淵 貴之

『白氏長慶集』中「古調詩」と「古体詩」之關係

杜 曉 勤

第二六六回(二〇一三年四月二十七日) 於教育学部一階会議室

開元「五王」と唐代音楽文化 劉 潔

明末の出版と小説批評

—『封神演義』鍾伯敬評を中心に— 岩崎 華奈子

友悌の詠月詩—杜甫から蘇軾へ 原田 愛

南宋出版文化と中間層文人—王十朋『会稽三賦』史鈔注
を例として— 甲 斐 雄一

第二六七回(二〇一三年七月二十七日) 於四階会議室

陳冷血の翻訳小説『生計』に対する一考察 国 蕊

左思「三都賦」と西晋司馬政權 栗山 雅央

元稹の家系と彼の十代の詩作について—十六歳の作「代
曲江老人百韻」を中心に— 長谷川 真史

第二六八回(二〇一三年九月二十一日) 於四階会議室

張愛玲と漢奸疑惑—「華麗縁」を中心に— 橋 本 結 花

明代小説における批評と評者—李卓吾評と鍾伯敬評を
めぐって— 岩崎 華奈子

近世日本における中国琴学の受容について 中尾 友香梨

藝術的「徳連」与「符讖」学説——兼談『拾遺記』整理
中的相關問題
林 嵩

第二六九回（二〇一三年十一月十七日）

*特別企画「心をつなぐ目加田誠と漢籍」

——大野城市所蔵の目加田文庫について——

於大野城市まどかびあ・三階大会議室

漢代画像石と語り物文芸

柳 川 順 子

目加田文庫の創設について

（大野城市企画政策部
歴史をつなぐ事務進室）

舟 山 良 一

中国藝座談会（目加田誠主宰）と目加田文庫（漢籍）

について

竹 村 則 行

目加田誠先生の思い出

松 崎 治 之

〔開催の詳細は本誌編集後記を参照〕

○他学会・研究会での発表（九大中文室生のみ掲載）

*第一一回九州中国学会大会発表

（二〇一三年五月十一日〜十二日、於琉球大学）

『封神演義』における鍾伯敬評の検討 岩 崎 華奈子

唐玄宗兄弟「五王」とその宮廷音楽文化 劉 潔

蘇東坡の詠月詩——兄弟を偲ぶ月 原 田 愛

*第十七回宋代文学研究談話会発表

（二〇一三年六月十五日、於早稲田大学）

蘇天爵『国朝文類』初探——宋末文人の収録状況を中心に——

奥 野 新太郎

*第六十五回日本中国学会大会発表

（二〇一三年十月十二日〜十三日、於秋田大学）

明末清初刊の小説における「鍾伯敬先生批評」本の再検討

岩 崎 華奈子

西晋武帝期における文人の著述活動とその立場

——左思「魏都賦」の分析を中心に—— 栗 山 雅 央

○社会連携事業

*目加田誠先生・さくを先生旧蔵書中の漢籍の整理と目

録作成（二〇一二年度、大野城市歴史をつなぐ事業推

進室）

*郭沫若と熊の川パネル展（二〇一三年三月一日〜三十

一日、佐賀市富士町熊の川温泉・衛の湯）

*講演：郭沫若『行路難』と佐賀熊の川温泉（二〇一三

年三月十六日、同右・衛の湯） 田 中 千 絵

○会員消息（事務局把握分のみ）

杜 曉勳 三月三十一日、招聘外国人教師の任期を満了

し、北京大学中文系に帰任。

林 嵩 四月一日、招聘外国人教師として、北京大学

中文系より着任。

土屋 育子 四月、東北大学大学院文学研究科准教授に転任。

大淵 貴之 四月、鹿児島大学教育学部講師に着任。

○会員近著（事務局把握分のみ）

柳川順子『漢代五言詩歌史の研究』

（創文社、二〇一三年二月）

東 英寿

『歐陽脩新発見書簡九十六篇—歐陽脩全集の研究』

（研文出版、二〇一三年二月）

土屋育子『中國戯曲テキストの研究』

（汲古書院、二〇一三年二月）

岩佐昌暉『中国現代詩史研究』（汲古書院、二〇一三年三月）

有木大輔『唐詩選版本研究』（好文出版、二〇一三年七月）

王 毓雯『清代文人蔣士銓とその戯曲研究』

（中国書店、二〇一三年八月）

土屋 聡『六朝寒門文人鮑照の研究』

（汲古書院、二〇一三年十月）

第二六九回座談会開催報告（編集後記に代えて）

彙報に紹介した通り、われわれの中国文藝座談会は、さる二〇一三年十一月十七日（日）大野城市の市民ホール「まどかぴあ」において公開講演会を開催した。これは一九五一年五月の発足以来はじめて大学構内を飛び出して催された特別企画である。一昨年来大野城市ですすめられてきた目加田誠先生、さくを先生ご夫妻の蔵書整理の完成を記念したものである。

当日は目加田誠先生ご次男懋様（現在札幌にお住まい）、ご三女東谷明子様（現在京都にお住まい）にお越しいただいたほか、全国各地の先生方、そして大野城市の一般市民の方々を併せ七〇名余の参加者を得た。実に予想を遥かに上回る盛会であった。

午後一時半の開会冒頭では、まず目加田文庫蔵書目録の完成を披露し、目加田懋様、東谷明子様お二人より井本宗司大野城市長にその蔵書目録が手渡された（写真1）。つづく井本市長の挨拶では、この文庫の寄贈が井本市長と目加田誠先生、さくを先生とご生前における長い交流が端緒となったこと、そして、大野城市職員および関係する多くの方々の並々ならぬ努力と熱意によって実現したことが紹介された。

講演会では、県立広島大学の柳川順子先生（嘗て大野城市在住）による漢代画像石と古代中国の語り物文芸につい



(写真1)



(写真2)

ての研究発表にはじまり、大野城市企画政策部「歴史をつなぐ事業推進室」を代表して舟山良一氏による目加田文庫創設に至るこの三年間（平成二十三年～二十五年）の作業の詳細と、この目加田文庫を大野城市の宝として今後どのように保存し活用してゆくかの展望をお話しいただいた。次に竹村則行先生に九大中文研究室を代表して、目加田誠先生の九州大学着任（一九三三・昭和八年）以来の歴史と、研究者としてまた九大中文研究室としての立場から見た大野城市目加田文庫の意義をお話しいただいた（写真2）。そして最後に筑紫女学園大学名誉教授の松崎治之先生に目加田誠先生のお人柄、そして研究者かつ教育者としての足跡とさまざまなエピソードをお話しいただいた。

会場内には目加田誠先生のお写真とともにご蔵書の中から「明万曆刊・臧懋循編『唐詩所』（零本）、清乾隆刊『呉具山三婦合評牡丹亭還魂記』、亀井昭陽自筆『古序翼』、郭沫若『金文余积之余』（郭氏贈呈識語あり）、そして先生の自筆ノートや原稿、また数多くの著作の中から『著作集』（龍溪書舎）、『風雅集』（惇信堂）、『歌集残燈』（石風社）、『中等時文教科書』（昭和十四年に先生が出版された中国語教科書）、『北平日記』（昭和八年から二年間在外研修で滞在された北京での日記、自筆本・未刊）（写真3）等が、そして本誌の前身『文芸座談会ノート』既刊号（全十七号の合計）が展示された。



北平日記 目加田先生北京滞在日記

(写真3)

約一万七千冊におよぶ目加田誠先生、さくを先生のご蔵書が、こうして今ご夫妻の過ごされた大野城市によって大切に保存され、地域に根ざした教育活動の場の中で新たな使命を得たことは、われわれ九大中文の後輩としてもこの上なく悦ばしく、有り難いことである。先生ご夫妻の研究者としての魂が、今も我々を見守り続けて下さっているかのような勇氣と温もりを感じる。思えば先生は、かの詩経の現代語訳に象徴されるように、古代の難解な文学を現代の私たちに、やさしく、かつ味わい深く提示することを実践された。また、このご蔵書群がいみじくも示しているように、先生は一つの対象に没頭して他を顧みないというような凡百の研究者にありがちな態度を諷められ、幅広い視野から文学を、そして人間そのものを終始見つめ続けられた。講演会

終了後の雑談において、目加田誠先生の高弟である松崎治之先生、高橋繁樹先生が奇しくも異口同音に語られた「目加田先生は〈中国文学〉の研究者ではなく〈文学〉を研究しておられたのだ」とのお話は、まことに紳に書すべきものがある。現在大野城市では地域の歴史文化の拠点として「大野城心のふるさと館」（仮称）の建設を計画中であり、同館の一室に目加田文庫が一般公開される予定である。目加田文庫は、先生ご夫妻が集められた日本古典文学・中国文学双方の研究書を併せ持つ稀有な文庫である。そして、ご夫妻の歩まれた人生とともに深められた人間味の溢れるコレクションでもある。当九大中国文学会においても、こうした地域の文化事業に可能な限り協力し続けたい。

(静永 健記)